

工業簿記

第4問 (20点)

製品乙を連続生産するクレール工業株式会社はパーシャル・プランの標準原価計算を採用している。

次の【資料】にもとづいて、下記の各問に答えなさい。

【資料】

- 製品乙の1個当たりの標準原価の一部は以下のとおりである。

直接材料費の標準配賦率は、標準単価 16,800 円/kg×標準消費量 1kg=16,800 円/個であり、直接労務費の標準配賦率は、標準賃率 19,200 円/時間×標準直接作業時間 0.3 時間=5,760 円/個により配賦している。

- 製造間接費は、標準直接作業時間を配賦基準として配賦されている。なお、製造間接費には変動予算が設定されている。年間の正常直接作業時間は 21,000 時間であり、年間変動製造間接費予算は 226,800,000 円、年間固定製造間接費予算は 340,200,000 円である。

- 当月の勘定記入データの一部は以下のとおりである。

仕掛品			
前月繰越	12,558,000	製品	168,630,000
直接材料費	()	原価差異	()
直接労務費	()	次月繰越	9,492,000
製造間接費	()		
	()		()

なお、材料は工程の始点で投入される。前月繰越分の加工進捗度は 60%、次月繰越分の加工進捗度は 50%である。

- 当月の実際製造費用は次のとおりであった。

直接材料費 91,735,000 円 (5,475 kg)

直接労務費 33,400,000 円 (1,740 時間)

製造間接費 47,190,000 円

問1 当月の製造間接費標準配賦率を計算しなさい。

問2 当月の製品乙の完成品数量を計算しなさい。

問3 直接材料費差異を、価格差異と消費量差異とに分析して計算しなさい。借方差異か貸方差異かを明示すること。また、不要な場合には () 内は○で囲まなくてもよい。

問4 直接労務費差異を、賃率差異と作業時間差異とに分析して計算しなさい。借方差異か貸方差異かを明示すること。また、不要な場合には () 内は○で囲まなくてもよい。

問5 当月の製造間接費標準配賦額を答えなさい。また、変動予算にもとづき、製造間接費差異を予算差異、能率差異、操業度差異に分析して計算しなさい。借方差異か貸方差異かを明示すること。また、不要な場合には () 内は○で囲まなくてもよい。

問6 仮にシングル・プランの標準原価計算を採用している場合、製造間接費勘定、仕掛品勘定で把握される原価差異の金額をそれぞれ答えなさい。借方差異か貸方差異かを明示すること。また、不要な場合には () 内は○で囲まなくてもよい。

第5問 (20点)

下記の【資料】にもとづき、次の各問に答えなさい。

問1 答案用紙に示した3月の材料勘定の記入を完成させなさい。

問2 内部材料副費差異の金額を借方差異か貸方差異かの判定とともに答えなさい。

問3 【資料】で、材料Qの受入と払出を、材料元帳を用いて把握する継続記録法によらず、仮に棚卸計算法によった場合で、3月中の消費量が判明しなかったとして、棚卸減耗費はいくらになるか。

【資料】

1. 材料Qに関する情報

- (1) 前月末繰越高は 20 個×6,400 円/個である。
- (2) 購入原価は購入の都度購入代価に外部材料副費を加算している。また、内部材料副費として購入代価の10%を予定配賦している。
- (3) 月末に実地棚卸を行う。材料Qの棚卸減耗費は正常なものである。
- (4) 材料Qの実際消費額の計算は先入先出法による。

2. 材料Qの3月における取引記録は以下のとおりである。

材料Qの受入と払出は材料元帳を用いた継続記録法によっている。材料Qは予定消費単価 7,700 円/個にもとづいて、材料費を計算し記録している。なお、3/29 に内部材料副費の実際発生額を計上し、予定配賦額との差額を原価差異として認識している。

3/5 購入 300 個 (購入代価 6,800 円/個 引取費用 120,000 円)

3/12 消費 240 個

3/15 購入 420 個 (購入代価 6,640 円/個 引取費用 124,320 円)

3/20 消費 410 個

3/29 内部材料副費 実際発生額 490,000 円

3/31 実地棚卸数量は 85 個であった。